

立正大学仏教学部（原愼定学部長）では東日本大震災第一周忌にあたり、3月8日に法要・特別公開講座を開催したが、さらに続いて9日・10日にわたり、学生・教員有志が被災地の岩手県陸前高田市において復興支援ボランティアに挺身し、一周忌正当の11日には宮城県仙台市若林区において慰霊と復興を願い、唱題行脚をおこなった。

一行は則武海源教授を団長として約35名。8日午後2時半にバスにて立正大学を出発し、夜8時半に拠点となる岩手県一関市千厩みなみ交流センターに到着。9日・10日は早朝より夕刻まで、陸前高田市においてボランティア活動にいそしんだ。震災から1年が経過し、ボランティア活動をおこなう人員の減少がとみに著しい現状の中、力を合わせて住宅の側溝の清掃やがれきの撤去などを積極的におこなった。最初は力仕事・土木作業等に戸惑いを見せる学生もいたが、徐々に役割を分担してこなせるようになり、作業のペースを上げていった。一同、「この経験は、なにものにも代えがたいもの」という思いを深くした。

そして一周忌にあたる11日には、早朝より仙台市に移動。日蓮宗本山孝勝寺を拠点として行脚の準備を整え、11時より、若林区下川原・名取川沿いの閑水大橋土手において最初の回向をした後、題目を唱え太鼓を叩いて行進する「唱題行脚（しょうだいあんぎゃ）」を開始。行脚隊は今回のために奉納された「立正大学」の鉢巻を締め、荒浜慰霊碑に向けて県道10号線を北上していった。有志一同、胸に込み上げてくる思いと涙をこらえて題目を唱え、道中にたたずんでいる被災地住民の方々と共に合掌・読誦し冥福を祈った。12時半に荒浜慰霊碑に到着した後、あらためて被災者の諸精霊に回向をおこない、被災地の一日も早い復興を祈った。その後、孝勝寺に戻り、本堂前にて結びの回向をおこなって行脚を終了した。一行の帰りのバスが立正大学大崎校舎に帰着したのは夜8時半であった。この一連の活動に参加した学生は、他者のために尽くし祈る「菩薩」の生き方の一端を、身をもって体験することができた。立正大学仏教学部では、今後も被災地の復興に向け、微力の一端を添えるべく、行動していく次第である。